

郷土歴史シリーズ
Vol.3

現存する国内最古の戸籍

筑前国嶋郡の

川邊里し戸籍

― 奴隸や妾もいた大家族制度 ―

● 岡本顕實著





▲奴国と伊都国の境、日向峠（福岡市側）から見た可也山（中央）の優雅な姿。その向うは玄界灘だ

草枕

旅を苦しみ

恋ひをれば

可也の山べに

さ男鹿

鳴くも

志摩町のシンボルとして、愛され親しまれている可也山（標高365m）。一説によると古代朝鮮の伽耶からの命名とも言われる。麓には中国古代の貴重な貨幣の「貨泉」（紀元1世紀）が見つかったことで有名な御床松原遺跡をはじめ、近くには朝鮮式の志登支石墓群があるなど、古くから韓半島との往来が証明されている。古代人は可也山を眺めつつ、旅情をなぐさめたのだろうか。富士山に似た優美な山容は筑紫富士とも呼ばれ、万葉集にも歌われている。



▲現存する、わが国最古の戸籍「川邊里戸籍」。8世紀初頭、今の志摩町を中心にあつた里の28戸(438人)分の戸籍が奇蹟的に残っていた。これから、古代家族の様相がうかがえ、まことに貴重な文献(正倉院文書)だ。

『川邊里戸籍』とは

戸籍とはなんだろう？ある辞典には「国民各個人の親族的な身分関係を記した公の台帳」と説明し、続けて「以前は家、今は夫婦を単位に作る」と解説している。

では、なぜ戸籍が必要なのだろうか。

戸籍には、さまざまな意味とねらいがある。少し大げさに言うと、国の骨格を作る取組みが古来、戸籍の作成であつたと言えよう。

「あなたは日本人ですか？」と問われ「はい、私は日本人です」と答えても、これだけでは、何の証明にもならない。あなたが、どんなに日本人にそっくりであろうと、また、どんなに日本語が巧かろうとダメだ。すべては戸籍の有無が決する。逆にどんなに風貌が外国人のようであろうと、戸籍で日本国籍に登録されている(帰化など)と、立派な日本人だ。

戸籍に載ると、国民としての義務(納税など)と権利(自由権、参政権など)が生じる。考えてみれば、ふだんの生活ではあまり意識しないが、戸籍の有無はわれわれの生活の根っこを支えている重大事だ。

現存するわが国最古の戸籍は、福岡県志摩町の『筑前国嶋郡戸籍川邊里』で、大宝2年(702)の作成である。正倉院文書の中に奇蹟的に紛れ込んで、残つたのが後世、発見された。この文書は古代の大家族制度の中味を具体的に明かしてくれるなど、等身大の生活感覚がうかがえる、まことに貴重な資料である。

4人姉妹を妻と 妾に。しかも一族 が堂々と同居

川邊里の最大家族は「肥君猪手」が戸主の124人で、口分田は全体で13町6反120歩(約14ヘクタール)であり、さらに郡長官の身分に対し6町(6反)が支給されたり。この家族構成を仔細に見ることで古代家族の実態がうかがえる。といっても、権力層のそれであることを断つておく。肥君家はこの時代、他家より以上に古代家族の様相を濃厚にとどめているようだ。在地の歴代の権力者で、九州の名家の流れを汲む。一説によれば肥氏は初代天皇、神武天皇の子の神八井耳命の子孫で、熊本の本火君の末裔だといふが、その辺の詮索は後に回そう。

▼この戸主の戸籍は縦に1行、そつ気なくこう記してある。

「戸主 追正八位上勳十等 肥君猪手 年伍拾参歳」と、字の間隔を一字もあけずピッシリと綴り、その下に少しあけて「正丁 大領 課戸」と続ける(左の写真、参照)。

このことから、いろいろなおことがわかる。戸主の肥君猪手はこの年(702年)53歳、朝廷から正八位上勳十等という位を受け、地方の有力者としては相当な高位である。嶋郡を治める長官の「大領」の位にある。

また、「正丁」とは21歳以上、60歳以下の男子

で、「課戸」とは納税の義務があることを指す。

言い換えると、ここ川邊里に志摩郡の郡役所があつたことを物語っている。この辺が志摩地域の中心地だったのだ。

▼2行目はこうだ。「庶母 宅蘇吉志須弥豆賣 年陸拾伍歳 老女」。「庶母」とは実母でないことを言う。65歳の義母といったところだ。

▼3行目。「妻 智多奈賣 年伍拾貳歳 丁妻」。52歳の正妻だ。姓が書いてない。たぶん右の行の庶母の「宅蘇吉志」と同姓であろう。

この時代、奴婢(奴隷)には姓がなかったが、れつきとした正妻が奴婢であることは考えられないから、正妻も庶母と同様、「宅蘇吉志」の一族と見てよからう。このことは大変大きな意味を持つのだが、だんだんに語ろう。

▼4行目。「妾 宅蘇吉志橘賣 年肆拾柒歳 丁妾」。妾が登場する。橘賣、47歳だ。

▼5行目。「妾 黒賣」。年42歳。

▼6行目。「妾 刀自賣」。年35歳。

黒賣も刀自賣も、ともに姓がない。これも前に出て来る橘賣にならって「宅蘇吉志」の略ととれよう。それにしても、正妻のあとに堂々と妾3人の名前が記されるあたり、現代の感覚では首をかしげざるを得ないのだが、その辺の考察は後に回そう(実はもう1人妾がいたらしいが、どうも早死にしたようだ。その妾の子が記されているのだ。)

もう一度、ここで整理しよう。

庶母 宅蘇吉志の須弥豆賣 65歳

正妻 〃 智多奈賣 52歳

妾 宅蘇吉志の橘賣 47歳

妾 〃 黒賣 42歳

妾 〃 刀自賣 35歳

ここから読み取れるのは、5人の女性がいずれも宅蘇吉志の出身であり、彼女らの年齢構成からして姉妹ではなかったか——ということである。

その5女の年齢構成はさらに戸籍の表記法から見て、いくつかのケースが考えられる。①庶母と正妻が姉妹であり、妾3人は別の姉妹である②年齢からみて、正妻と3人の妾が姉妹である——。また、こんなことも明らかになる。庶母は65歳で、戸主の猪手は53歳だから、まさか庶母の須弥豆賣が猪手を生んだとは思えない。すなわち、須弥豆賣は猪手の父親の妾であつたと考えられる。そうすると猪手の父親には須弥

妾 〃 黒賣 42歳

妾 〃 刀自賣 35歳

ここから読み取れるのは、5人の女性がいずれも宅蘇吉志の出身であり、彼女らの年齢構成からして姉妹ではなかったか——ということである。

その5女の年齢構成はさらに戸籍の表記法から見て、いくつかのケースが考えられる。①庶母と正妻が姉妹であり、妾3人は別の姉妹である②年齢からみて、正妻と3人の妾が姉妹である——。また、こんなことも明らかになる。庶母は65歳で、戸主の猪手は53歳だから、まさか庶母の須弥豆賣が猪手を生んだとは思えない。すなわち、須弥豆賣は猪手の父親の妾であつたと考えられる。そうすると猪手の父親には須弥



▶「筑前国印」の印面。戸籍の全面にピッシリと押印されていた。

ご案内

志摩町

歴史資料館



■福岡県糸島郡志摩町大字初
(志摩町役場前)

☎092(327)4422

※建物は、海をイメージして建てられた。すなわち、全体を船のかたちに、側壁は古墳のイメージ。前庭の巨岩は地元産で、二見ヶ浦の夫婦岩を模す(写真では見えない)。

平成8年4月、念願の歴史資料館がオープン。従来、遺跡や史蹟に富む志摩町に、この種の資料館がなかったことが不思議だったが、ようやく実現にこぎつけた。むしろ、町外からの参観者が多いのは志摩町の歴史・文化財が全国的に知れ渡っている証拠だろう。

歴史資料館の常設展示は8つのテーマで構成されている。古代から海とともに歩んで来た町の歴史を①住居コーナー②生活コーナー③交易コーナー④信仰コーナー⑤漁業コーナー⑥干拓コーナー⑦生産コーナー⑧墓制コーナーと、分け、ピジュアルにわかりやすく展示、解説する。また随時、特別展も開催される。

■施設 鉄筋コンクリート2階建て。延べ床面積1321㎡。

■開館 午前9時～午後5時。

■休館 毎週月曜日と年末年始。

■入場料 大人200円、小中学生100円(消費税別)。

■交通 JR筑肥線「筑前原駅」下車。昭和バス野北線「初」バス停下車。徒歩5分。



志摩の朝市



■福岡県糸島郡志摩町大字初
志摩町役場前の朝市会場
■連絡(携帯)090-4482-9210



「志摩の朝市」といえば今やすっかり近郷近在の名物となった。毎週日曜日の早朝、午前5時半から開く朝市。冬場はまだ暗いにもかかわらず、大勢の買物客が押し寄せる。専用の朝市会場には地元の農家、漁師、園芸業者など約60軒が店を開く。

野菜、果物、魚介類、饅頭、モチ、洋ランなどが季節ごとの恵みをそのままに所狭しと並ぶ。「新鮮、安全、安い」と、客足は遠く福岡都市圏から来る。最近若い女性や男性客の姿が増えた。

この市場で、おもしろいのが客と店側のやりとり。値段は双方の心意気で決まる。買物をすませた人の中には唐津方面へドライブに向う人も。朝市は多くの人に親しまれて活況を呈す。